



cycle ~隅田川ダンボールハウス計画~

k99037 木野勢 雄也

はじめに

本計画は隅田川沿いに住み着くホームレスに対し、単調なダンボールハウスの景観が都市の展示空間になりえるのではないかと考えたプログラムである。

敷地

敷地は台東区浅草。ここは東武伊勢崎線、都営浅草線、銀座線の駅があり、浅草雷門からも程近く、仲見世通り、浅草寺と地方や海外から多くの観光客が訪れる有名な観光スポットであり、下町の代表的な存在である。

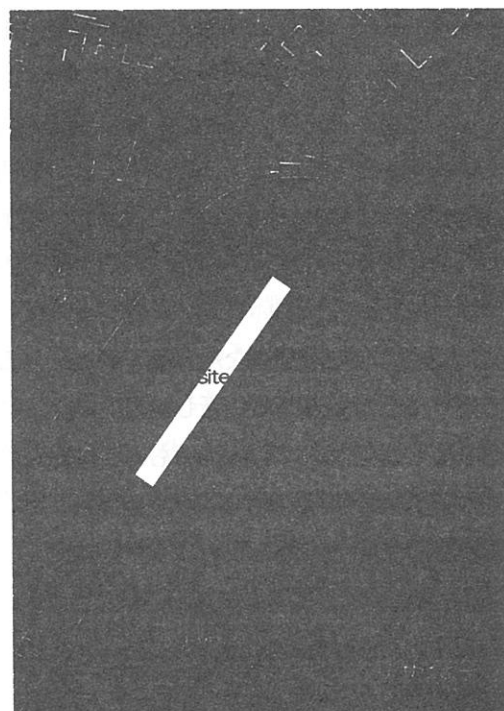
また、そこから程近い隅田公園は、地下にギャラリーを持ち、川沿いという好立地にありながら、現在川沿いのテラスにはホームレスが住み着いており、ギャラリーの利用率は低い。

コンセプト

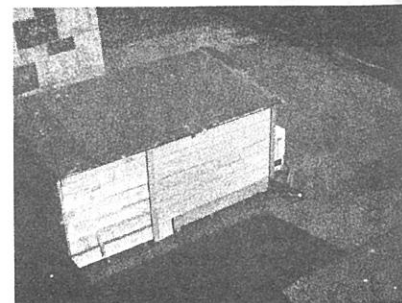
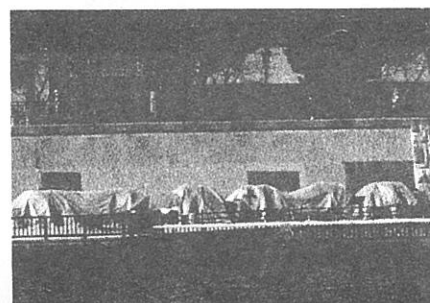
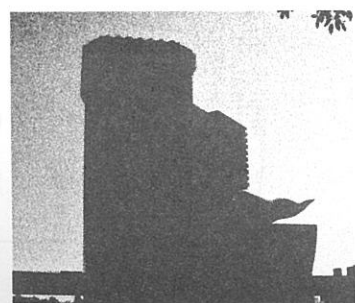
一般的にホームレスという存在は社会的な落伍者とみられ、暗い生活や背景を想像するが、彼らを公的な姿勢、考え方ではなく、彼らの生活を私的、主観的に捉えて、その存在を肯定した上で、その住まいについて考えてみた。

ホームレスは基本にお金が無く、それでも手に入るダンボール、木材、古いパネル、ブルーシートなどを拾い集め、それを材料として住まいを形成する。その結果として、川沿いには単調な青いダンボールハウスの景観が広がる。水上バス、高速道路、線路などからよく見えるこの場所は展示空間としての役割を果たし得るのではないかと考えた。

そこで、既存のギャラリーを建て直すと同時に、ホームレスの存在を利用することによって、川と公園という自然の中のアートパークを計画する。

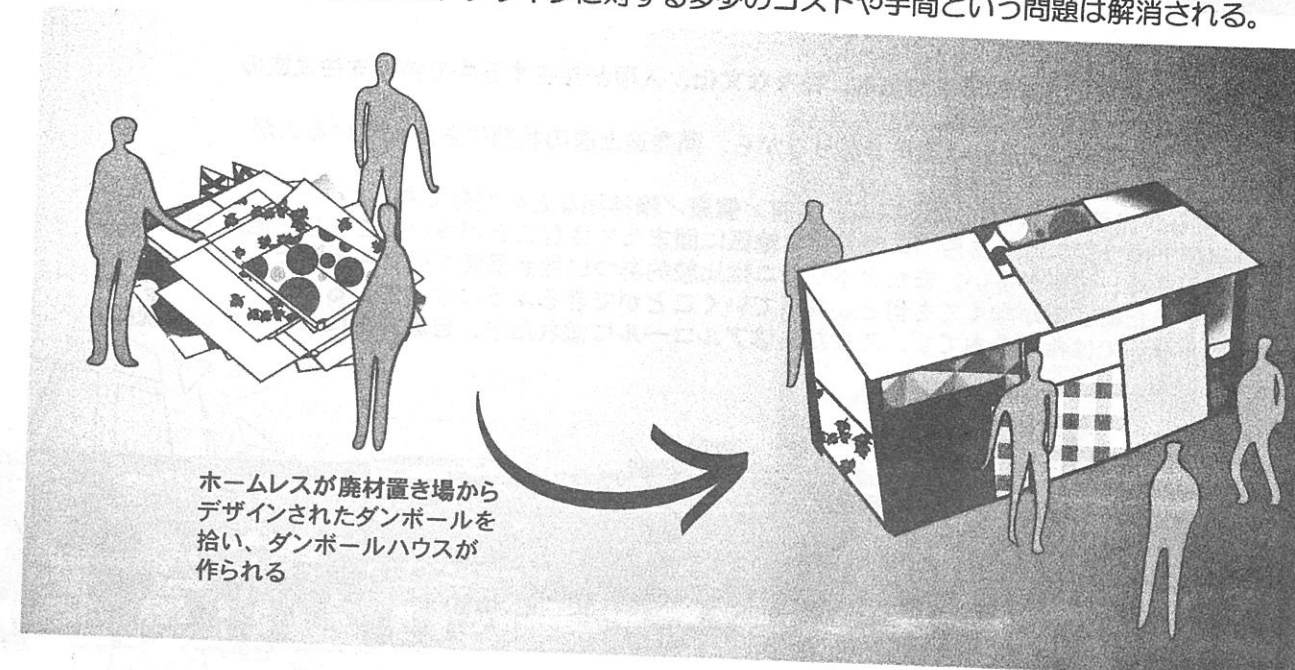


① 配置図 1/5000



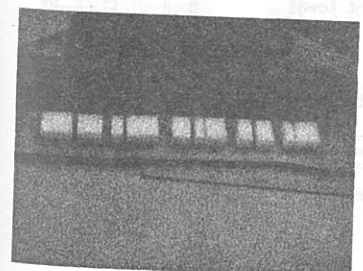
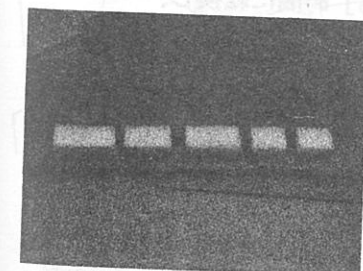
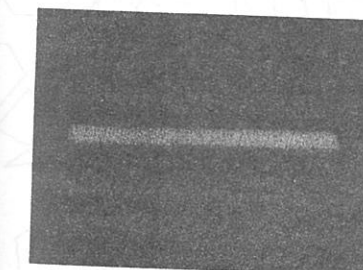
計画主旨

現在の単調なダンボールハウスの景観を変えるためには、その材料を変える必要がある。基本的にその材料となり得るには、ただもしくは安価で手に入れられることが条件となる。そこでアトリエやshopなどからでる廃材がデザインされたものであればいいと考えた。このデザインというのは仕入れなどで利用するダンボールをあらかじめデザインされたものにしたり、アトリエからでる廃材に対してデザインするというのである。この空間が展示空間になりえるなら、このダンボールハウスは宣伝、広告的な役割も果たし得るため、デザインに対する多少のコストや手間という問題は解消される。



計画

敷地に対してひとつのボリュームをおく。そのボリュームを大きな道によって分割する。さらにそのボリュームを小さな道によって分割する。こうしてできたそれぞれのボリュームにいろいろな性格を持つギャラリー、アトリエ、shopを配置する。そして一般人とホームレスの動線との関係、ホームレスにとって必要な水道、トイレの位置関係からヴォイドを作り、この空間が一般人の溜まり場になったり、ホームレスに与える廃材置き場になったりする。



指導教員 伊藤洋子教授